

「批判的実験哲学としての質的現象学」趣旨説明

河野 哲也 (Tetsuya Kono)

所属 立教大学

1. 趣旨説明

実験哲学とは、「安楽椅子の哲学」と呼ばれる専門家の思考によってのみ論証される従来の哲学への批判として、哲学を専門としない一般の人への調査を通して、哲学が自明視してきた考え方や判断を再検討する、既存の哲学への批判的方法である。環境思想家として著名なアルネ・ネスが哲学の専門家の定義する「真理」なるものが一般の人々の言語使用からは著しく意味が限定されていることを示した 1938 年の著作が、その先駆である。哲学的問題を経験的・実証的手法で調べる学際的な試みを通して、専門家の直観や概念化のバイアスを明らかにできる。

この実験哲学の方法は、さまざまな科学、とりわけ精神諸科学に、科学基礎論として応用することができる。科学的実験過程から生じた概念ではなく、日常言語を専門化した形で生まれてきた人間諸科学における諸概念は、日常言語の規範的な意味が含まれたまま事実の認定や画定に用いられている。専門家の認める事実、その専門分野の規範が無自覚に負荷される、いわば「規範負荷性」は、とりわけ臨床や教育などの分野で問題となる。なぜなら、その対象となる患者や子どもに関する「事実」が、最初から専門家の規範の枠で判断され分類され、特定の規範が無批判のままにその分野に浸透してしまうからである。当事者の判断や経験さえ、その枠組みに沿って記述される。

本ワークショップでは、当事者の視点からの環境記述である現象的な質的記述が、専門家の概念化と範疇化を相対化する実験哲学、より正確には、「批判的な実験的科学的基礎論」となりうることを示すことが目的である。ある分野の科学的概念や理論化が、とくに行動科学において、当事者による自己の行為や心理状態の記述から乖離する場合には、反省を迫られるのは科学の方であるはずである。

2. 発表の展開

河野哲也 (立教大学) は、西村 (2025) や村上 (2026) を参照しながら、質的現象学の方法と、その批判的な科学的基礎論としての意味を、上記のように考察する。

黒子彩子 (杏林大学/立教大学) は、質的現象学の観点からの当事者の経験の記述によって、第三者から見えにくい実践の実像と意味の言語化が可能となり、「養護」の理論構築において必要不可欠な意義を持つことを指摘する。養護教諭の実践の根拠となる「養護」の理論体系は確立の途上であり、卓越した「実践の実像を記述し解釈する理論」(Benner, 2000) が求められている。質的研究における現象学の目的は、「一つの現象の生きられた経験の意味を記述する」(松葉, 2017) ことである。本提題では、熟練した養護教諭がその場で何を知覚し、どのような心の動きが生じたかといった主観的な経験の中にこそ、「養護」の本質が埋め込まれているという立場から、現象学的手法を用

いる意義を示す。具体的には、保健室の場において参与観察と非構造的インタビューを実施し、そこに見られる子どもを観察する養護教諭の視線や表情、しぐさ、子どもとの対話等の詳細な情報と養護教諭が語る主観的経験の記述を統合し、それに現象学的な視点から解釈を試みる。こうした質的研究方法により、実践者の語りと研究者の視線が相互に浸透した間主観的な分析（松葉，2017）がはじめて可能となる。

棚橋愛（立教大学）は、看護師として胃がん第3期の患者を学生とともに受け持った際の経験を取り上げ、従来の理論化では捉えきれなかった臨床教育の場における行為の創発性を、二人称的現象学の視座から明らかにする。臨床教育の場では、患者・家族・学生・教員が同じ空間に共在し、互いの身体的・情動的反応が複雑に絡み合いながら、その都度の状況に応じた行為が生成されていく。そこでは、あらかじめ計画された指導や、個人の内部に起源をもつ意図的行為だけでは説明できない、関係的で創発的な行為の立ち上がりは日常的に生じている。しかし、このような行為の生成過程は、従来の臨床教育研究では十分に記述されてこなかった。特に、言語化される以前の身体的了解、沈黙の共有、他者の存在に触発されて生じる応答責任といった二人称的な現象は、教育の成立条件として本質的であるにもかかわらず、理論的に扱われることが少ない。現場での臨床的判断は、それ自体極めて適切で合理的でありうるが、その現場での判断を言語化し、判断の妥当性や合理性を逐一実証的に正当化することは困難である。それは、動的な状況において、時間的に生じている、即興的な行為であり判断であり、それらは、反復可能性を前提とした量的研究では捉えられないからである。一・二人称的で即興的な実践経験を現象学的に解釈することで、臨床教育の基礎論を再構築するための看護の課題を提示する。

得居千照（静岡福祉大学）・毛利かなえ（中央大学）は、実験哲学の理論構造を応用し、科学における一人称の語りの有効性、つまり、科学の方法論として、個人の語りはいかなる貢献を果たし得るのかについて、心理学的・教育学的に明らかにする。実験哲学は、哲学を専門としない人への調査を通して、従来の哲学が自明視してきた考え方や判断の批判的な再検討を行う。この構造を応用し、小学生や高校生を対象に行われた「哲学対話」を子どもがいかに経験しているのかについて、当事者である子ども自身による自らの経験の語りや非言語的行動を、質的現象学の方法を用いて分析する。分析の対象となる哲学対話の方法や実践概要を明らかにした上で、従来、データの信頼性の欠如から検討の対象から除外されがちであった子どもの語りを聞き取ることや、対話中の非言語的行動を読み解くことに着目することを通して対話の本質が示される。最後に、対話という社会的・制度的営みそのものの意義を以上の実証研究から解釈する。

以上、現象学の「主観的」とされる当事者の質的な経験記述によって、既存の「客観的」科学の権威主義的バイアスを明らかにする。当事者の観点を行動科学に導入することは、その規範的な枠組みを問い直し、その概念化と理論化のオータナティブをもたらす契機となりうることを明らかにする。

養護教諭の主観的経験からみる「実践の意味」の探究

黒子 彩子 (Ayako Kuroko)

所属 杏林大学保健学部・立教大学大学院文学研究科博士後期課程

1 問題の所在

養護教諭は、その職務を「養護をつかさどる」と規定されているが、実践の根拠となる養護の理論体系は、現在も確立の途上にある。2000年代に入り、経験豊かな養護教諭の実践に焦点を当てて養護を追究し、実践に内在する養護を言語化する試みが重ねられ、理論の構築にもつながってきた。

一方で、保健室における養護教諭と子どもとの実際のやりとりを検討した研究については、すでに理念化され、理想化された事例であり、実証的研究に耐えうる構成を保持していないという批判もなされている（秋葉, 2004, p. 15）。この指摘は、いわば、養護教諭の研究を養護教諭の実践を取り巻くコミュニティの外側から眺めた指摘と言えよう。養護教諭の実践にかかわる研究について、“実践を熟知する養護教諭や研究者であるからこそ”、知らず知らずのうちに既存の理念が入り込むことへの批判とも考えられる。こうした批判を乗り越えるためには、どのようなアプローチが必要であろうか。

2 質的現象学を用いた記述の必要性と必然性

看護実践の解釈的理論を展開した Benner (2000) は、日々実践されている熟練看護の実像を記述して、解釈し説明する理論の必要性に言及した (p. 6)。養護の理論の構築においても、日々の実践に内在する養護を言語化する研究の蓄積が不可欠であることは、おそらく疑う余地がない。Benner (2000) は、実践的に状況に関与する活動が、反省的な理論的思考よりも先行するという Heidegger の見解を示し、第一線の臨床実践が、おそらく現在のどの理論的説明をも越えており、そこには新たな理解が体现されていることに言及している (p. 25)。このことは、養護教諭の実践にも通底すると言えよう。

これまで養護を言語化する試みにおいては、主に養護教諭の意図や行為、あるいは信念等に焦点が当てられてきた。そして、インタビュー調査や事例研究を通して、実践者が言葉として紡ぎ出した内容が分析の対象となってきた。養護教諭は、専門家としてのアイデンティティを確立する過程において、“理想化された”とも形容される理念を学びとっている。それらは、職務の遂行にあたり重きを置かれてきた理念であり、養護教諭としてのアイデンティティを支える基盤ともなっている。そのため、意図や行為に着目したインタビュー調査や事例研究において、理念を反映した思考や行動が言語化され続けてきたことは、養護教諭の職能的アイデンティティの表れでもあると考える。

一方で、当事者である実践者が、実践の間に何を経験しているか、また、実践者が捉える瞬時の知覚や心の変化がどうであったか等、実践における実践者の内的な経験には、あまり焦点が当てられてきておらず、また、焦点を当てる方法も見出されてこなかった。しかし、実践者の主観的な経験の中にこそ実践者の養護の本質があり、その本質を言語化する営みが必要なのではないかという点が、本発表の第一の主張である。

本発表では、熟練養護教諭の語りをもとに、質的現象学を用いて解釈を加えることの意義を提示する。まず、村上（2025）が示す現象学的質的研究の方法を参考に、語りにおける言葉づかひのディテールに着目し、どのような文脈で何を知覚し、何を感じたのか、実際にどのような経験であったのか等、実践者が必ずしも意識していない、生きられた実践の文脈、運動や構造を捉える。そして、ありのままの現象としての熟練養護教諭の実践のあり方と、その意味を考察する。さらに、熟練養護教諭が実践を行う保健室の「場」において、養護教諭及び子どもの視線や表情、しぐさ、動きや行為、対話等を参与観察することにより、熟練養護教諭の主観的経験の一部を、研究者の視線を通じた現象としても捉えることが可能となる。

本発表においては、こうしたプロセスを経て、理念として定義される以前の、第三者から見えにくい実践の実像と意味の言語化を実現することが、理論構築において必要不可欠な意義を持つことを提案する。

3 質的現象学を用いた記述がひらく可能性

実践を具体的に解釈する手がかりとして、解釈的現象学における5つの道標（「状況」「身体性」「時間性」「関心事」「共通する意味」）（Benner, 2006, p. 98）がある。これらは、実践を理解し、読み解くための視点として用いられてきた。しかしながら、熟練養護教諭の語りをもとに実践を解釈していくと、実際の実践には、5つの道標では捉えることができない特徴的な側面もあることに気付かされる。

一つは、実践の基盤となるようなあり方である。熟練養護教諭は、当たり前のように日常に埋め込まれたケアを継続させていた（黒子, 2026, p. 166）。熟練養護教諭のケアの特徴とも言える様相であることから、「日常性」や「継続性」といった視点を加えることで、実践のあり方をより鮮明に解釈し、記述できるのではないかと考える。

あわせて、熟練養護教諭の実践の広がりや深まりなど、実践の動態を示す視点を加えることも必要と考える。熟練養護教諭は、ケアの対象である子どものみならず、周囲の他者にも養護を浸透・波及させていた（黒子, 2026, p. 166）。そのため、実践の記述にあたり、「浸透性」「波及性」といった実践の動態を示す視点も欠かせないと考える。

なお、実践のあり方は、動的な様相ばかりではない。「状況」を統合的に鑑みて、あえて能動的に働きかけない様相も見られたが（黒子, 2026, pp. 157-158）、熟練養護教諭の「身体性」「関心事」「時間性」に基づいた、熟練者ゆえのあり方と考える。こうしたあり方を捉えるには、「選択的な静止性」とも言える視点も必要ではないか。

本発表では、熟練養護教諭の実践を、質的現象学を用いて解釈し、記述したことで見えてきた視点があることも提示する。質的現象学を用いた実践の記述は、一つの実践の記述にとどまらず、他の実践を解釈し、記述するための新たな視点を見出す方法論にもなり得るという点が、本発表の第二の主張である。

文献 秋葉昌樹（2004）『教育の臨床エスノメソドロジー研究 保健室の構造・機能・意味』東洋館出版社／Benner, P.・Wrubel, J.（2000）『現象学的人間論と看護』（難波卓志訳）医学書院／村上靖彦（2025）『現象学的質的研究入門 一人ひとりに固有の経験と向き合うために』ナカニシヤ出版／Benner, P. 編（2006）『ベナー解釈的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理』（相良-ローゼンマイヤーみはる監訳）医歯薬出版株式会社／黒子彩子（2026）「ケアの実践における『養護』のあり方の考察—熟練養護教諭の語りの分析を通して—」『立教大学教育学科研究年報』第69号, 149-169

臨床教育における行為の創発性と二人称的現象学

棚橋愛 (Ai Tanahashi)

所属 立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程

1. 目的

臨床教育の場では、患者・家族・学生・教員が同じ空間に共在し、互いの身体的・情動的反応が複雑に絡み合いながら経過、状況に応じた行為が生成される。そこでは、計画された指導や意図的行為だけでは説明できない、関係的で創発的な行為が立ち上がる。行為の生成過程は、従来の臨床教育研究では十分に記述されてこなかった。特に、言語化される以前の身体的了解、沈黙の共有、他者の存在に触発されて生じる応答責任といった二人称的な現象は、教育の本質的であるにもかかわらず、理論的に扱われることが少なかった。臨床的判断は合理的であってもそれを言語化し実証することは困難である。動的な状況で即興的に生起しているからである。本発表の目的は、看護ケアが個人の内部に起源をもつ意図的行為ではなく、“あなた”として立ち現れる他者とのあいだでどのように生成するのか、そして看護教育はいかにその生成を基礎として捉え直すべきかという根源的問題である。これは、臨床教育の場における行為の創発性を、二人称的現象学の視座から明らかにすることである。

特に、身体で語り合うこと、了解と寄り添い、地平を共有し紡ぎあい、受け入れていくという事象がどのように生成されるのかを記述する意義は深い。生きることの切実さと、患者が教えてくれたことを通して、臨床教育の基礎論を再構築することは看護の課題を明確にする上で適切な試みである。

2. 看護行為の創発性

本事例は、胃がん第3期の患者を学生とともに受け持った際の経験である。患者に初めて対面した瞬間に感じた、患者の浅い呼吸、薄黒い脆弱な皮膚、緊張感のある鋭い眼差しは、患者が筆者らに「あなた」として迫ってきた。看護師と学生の身体は言葉より先に反応する。Merleau-Pontyが述べるように、前反省的な意識のレベルにおいて、患者の世界に巻き込まれ、身体で語り合っている。

二人称的立ち現れは、看護師本人の身体が世界に向かって開かれ、他者の徴候を前言語的に受け取る構造に支えられている。胃がんの治療ができない状態は、全身に病魔が浸潤し、寝返りを打つのに憚られるほどの苦悩に満ちているのである。身体中のどこかしこが痛み、顔がゆがんでしまう。息をするのもやっとなで、すべての意識が身体内部へと閉じて行ってしまふ。身体の外側の出来事に顧慮することなどできなくなる。まさに悪液質がもたらす生き地獄である。患者の眉間のしわと固くつむられた目が語っている。閉じられた瞼の裏に絶望や究極の悲嘆が潜んでいることを私たちは知らずにはいられない。患者の冷えた指先は手を握ること、渴いた唇は口腔ケアの必要性として、二人称的呼びかけとして看護するものの身体に届く。学生が「支えていきたい」という心

の動きは、患者の現実に触れた身体的反応であり、すでにその世界に巻き込まれていたことを示す。看護は、患者の身体が差し出す「それ以外には考えられない」切実を受け止め、応答し返すプロセスとして成立する。すなわち、看護行為とは、その場の人々が互いの身体的地平や身体の後にある文脈と個々の状況を相互に請け負いながら生成される“創発的行為”である。この創発は、多声的で対話的なコミュニケーションとして立ち現れる。

患者はときに「私は大丈夫です」と訴えるが、その言葉は、自己を守るための否認ではなく、家族や学生を思う「応答責任」の表れである。寄り添おうとする学生も、相手が自分達に向けている態度を、言葉の背後に知覚的に感受し、それに自分の眼差しで患者を包み、苦痛をもたらしている部分に手のひらをそっと添えるのである。どこの部分をどのようにということより、ひきつけられるように身体のふれあいがもたらされる。

3. 受け入れていくという事象の成り立ち

患者の状態が急速に悪化するなか、身体的地平における相互の浸透は深まっていく。こうした渦中において、現実には起きていることをありのままに「受け入れる」とは、単に事実を理解することではない。家族は涙の中で、患者のこれからを受け入れようと揺れ続けていた。学生は、患者の最期に向き合うという現実を前に、この患者に何ができるのかという問いに応えるように身体を介して対話を始めた。受け入れとは、静的な到達点ではなく、関係の中で生成し続ける動的なプロセスである。それぞれの身体が生と死という深くて柔らかいところに沈殿している意味にどちらからともなく互いに触れ合いながら、導き出すようなプロセスを協働して形づくっていた。

4. ケアが行き届くこと

患者の苦しみ、学生の感じたことのないざらつき、教員の佇まいは、別々の主体の内部で起こるのではなく、互いの身体的地平のつながりとして信じられ、応答を呼びかける場として立ち上がる。その場においてケアは、存在が存在を許容しあう温度の次元で生成する。触れる／触れられる、見る／見られる、呼ぶ／応えるという可逆性のなかで、私たちは互いの世界に開かれ、再現不可能な「今、ここ」の厚みに身を置く。最期の瞬間に立ち会うとは、死を理解することではなく、その不可逆性の前で温度として傍に在ることを許容することである。こうした生きられた実践の創出は、科学的根拠に基づいた知識が文字にとどまることでなく、身体を介して世界に臨み、生きている事実を解釈するためのツールとして活用する対話的に呼応しあう営みであるといえる。そのために、看護教育は身体的地平に他者との対話の連鎖を知的に創出していく行為でなくてはならない。知っていることは当然でしかなく、それを「あなた」に届くような生きられた実践とし生み出していく澄んだ倫理観と誠実な探究心が教育の素養に求められるのである。すなわち、対象の前景をありのままに受け入れその声を大切に聞こうとすること、立ち現れてくる事象に向き合い、知覚される何かについて問い続ける自己研鑽のありようが生きられた実践の源泉となるのである。それらに対する絶え間ない真摯な呼応、知的な対話を育んでいくことが課題である。

哲学対話における子どもの質的現象学の方法論

得居 千照 (Chiaki Tokui)¹・毛利 かなで (Kanade Mori)²

¹ 静岡福祉大学・² 中央大学 文学研究科

1. 研究の目的と問題の所在

本研究の目的は、哲学対話における子どもの経験を記述する最も良い方法を提案することである。そのため、学習の当事者である子どもがいかに対話を経験しているのかについて、子ども自身による経験の語りや非言語的行動を、質的現象学の方法論で分析していく。

本研究の背景には「子どもの学びを語りうるのはだれか」という問いがある。これまで教育者・研究者は、子どもたちの発言や記述、ときにはインタビューを分析して、子どもがどのように学び、なにを獲得したのか、子どもの学習を意味づけたり、教育効果を明らかにしたりしてきた。この営みは、教育実践の有効性を支持するエビデンスとなっている。ここで重要視されるのは、エビデンスの客観性であり、科学性である。ゆえに、子どもの学びを語りうるのは、客観的で科学的である第三者としての教育者や研究者、つまり、大人であることが前提とされてきた。

しかしながら、教育において子どもの声を取り上げられるとき、そこには「大人の勝手な思い込み」(元森 2020, p. 28) が内包されている。エビデンスを得るため、客観性や科学性を重視すればするほど、そこには大人の意図が入り込み、子どもの声をそのまま聞くことから遠ざかってしまう。つまり、子どもの声を聞こうとするとき、大人は、大人の都合や想定範囲内で子どもの声を聞いている。

では、子どもの声をそのまま聞くことと教育研究のエビデンスを導くことを両立させるためには、どのような方法論を見出すことができるのだろうか。本研究の試みを通して、科学における一人称の語りの有効性、つまり、科学の方法として、個人の語りはいかなる貢献を果たし得るかについて言及する。

2. 哲学対話の分析対象

本発表が分析の対象とするのは、2026年3月8日(日)に江戸川区子ども未来館で開催された「子ども哲学対話」での哲学対話である。対象は、小学校5・6年生4名とファシリテーター1名、ボランティア1名の計6名による対話の記録である。

江戸川区子ども未来館では毎月小学3年生～6年生を対象とした哲学対話が実施されており、対象とする3月は年度内最終回となる第12回目が行われた。今回は、参加者が自由にテーマや問いを決める手法である「プレーンバナナ」を用い、各グループで問いが決定された。問いは「なんのためにお金があるの?」である。

参加者は円形になって座り対話を行うため、360度カメラを中央に配置し撮影した。また、ICレコーダーによる録音と、iPadによる録画データを用いて分析する。なお、本調査は、研究協力者となる児童及び保護者からの同意を得て実施された。

3. 研究課題とその方法

本研究の目的を達成するため、以下3つの課題を設定し、それぞれの方法を提示する。

①子どもの経験は、いかに捉えられてきたのか。

これまで哲学対話を対象とする社会科学的研究は、会話分析や相互行為分析の手法を応用した質的研究や質問紙調査によって傾向性を明らかにした量的研究がある。フリック (2011) が指摘しているとおり、量的・質的研究は、異なった側面から相互補完的に対象を分析することを可能にする。そこで本研究では、同一の実践を、①非言語的行動、②子ども自身による経験の語り、という2つの方法を用いて分析する。

②いかに非言語的行動を記述することができるのか。

哲学対話における非言語的行動を記述する方法論を示すため、p4cのルールである「コミュニティボール保持者が発話し、発話終了後に次に話したい人にボールをパスする」に着目し、「パス方向と回数」を行動指標として、哲学対話の流れを可視化することを目的とした。Lipman (2010) は、P4Cの目的を、子どもたちが自分自身で考える方法を学ぶことにあると述べている。本研究では、Lipmanの“子どもたちが自分自身で考える方法を学ぶことにある”考えをパス割合として捉え直し、数値化を試みた。すなわち、本研究では、哲学対話における流れを「パス方向と回数」の行動指標により可視化し、「対話が進むにつれて子どもから子どもへのパス割合が増加する」仮説を検討する。

③いかに子ども自身による経験の語りを聞き、記述することができるのか。

自分自身の経験をそのまま語ってもらうための手法として村上 (2026) を参考に分析する。哲学対話の実践後、非構造化インタビューを実施した。子どもに協力を求める際にも、哲学対話がどうであったかを聞きたい、ということだけを伝えた。

4. 発表の構成

本発表は、次の手順で検討を進める。第一に、教育実践の効果検証を重視するあまり、子どもの経験をそのまま聞き、記述することへの関心が希薄であったことを先行研究の分析により指摘する。第二に、分析対象となる江戸川区子ども未来館「哲学ゼミ」での哲学対話の概要を子どもの相互行為の全体像とともに示す。第三に、非言語的行動や子どもの経験の語りに焦点をあて、質的現象学の方法論を応用し分析する。

以上の検討から、子どもは、自分の経験を自分の言葉で語ることで存在であることを指摘する。従来のように、研究者が規定した枠組みを用いて子どもの声を聞こうとする方法は、子どもの経験を大人が有する既存の枠へと押し込め、豊かな経験の語りを矮小化させる危険がある。ゆえに、今後求められるのは、一人ひとりの生に根ざした文脈依存的な語りの中にある真実を見出すことのできる方法論である。本研究から、その方法論は、子どもの言葉をそのまま聞くことから始まる、という可能性が示唆された。この問題意識は、経験から切り離された安楽椅子の哲学への懐疑とも共鳴している。

文献

ウヴェ＝フリック著、小田博志監訳 (2011) 『新版 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社／村上靖彦 (2025) 『現象学的質的研究入門 一人ひとりに固有の経験と向き合うために』ナカニシヤ書房／元森絵里子・南出和余・高橋靖幸編 (2020) 『子どもへの視覚 新しい子ども社会研究』新曜社／Lipman, M., Sharp, A. M., & Oscanyan, F. S. (2010). *Philosophy in the classroom*. Temple University Press.